

義林子作 人名部

あきさだ 香春大炊之助顯定。 因幡國山城主の畜にして生來敏者なり。 大和國宇陀郡龍門家の息女舞姫の前との婚約成りて其舞入の際、 異母弟憲法は龍門家の奸策を豫知し、 兄の危命を救ふ爲顯定と伴り、 龍門家に來つて祝言の席に臨む。 顯定は弟の心を知らずして之と口論せしが、 其實を知るに及んで感に堪へず、 髪を切つて出家の身となる。 後に憲法の子久吉罪なくして石川五右衛門と共に釜煎の刑に處せらるるや、 官命じて久吉の價に顯定を本領に安堵せしむ。 此れより龍門家繁榮することとなる (傾城吉岡染)。

あきたた 大宮大納言秋忠。 正親町天皇の勅使となり、 足利十三代の武將義興の御所に行き、 兩頭の龜を出して之を判じて勅答すべきを命ず (津國女夫池)。

あきひろ 橋立左衛門秋廣。 丹波國の住人にして官中南門守護を勤む。 特統天皇より夏仁親王捜索の勅命を蒙る。 折しも春彦尊に召されて参る途中、 布引先生勝成に遇ひ、 勝成より春彦尊の命に應ぜぬやう言聞かされ、 聽かずして龍田明神に至り、 春彦尊の逆心を結實したる爲搦められて恨死し、 其靈魂忽ち尊の魂と入替り、 鳳鸞を搦めたる繩を切り、 萬九郎の縛を解き、 尊と一味せる鳥居三位青根郡司を殺す。 かくて後秋廣の魂魄は尊の乘れる馬の手綱を執つて動かせず、 以て

之を激すに至る (特統天皇歌車法)。  
あこくしやう 阿克將。 薩國國治大

あこや 阿古屋。 京都清水坂の遊女なり。 惡七兵衛景清と馴染みていや石いや若の子を生む。 平家滅亡後景清落ち人となり、 畠山重忠を狙ひしが覺られて遁れ、 阿古屋を尋ね來つて清水觀音に詣つ。 是時阿古屋の兄伊庭十濤廣近が景清を訴人せんとす。 阿古屋これを制止せしが景清と情交を結べる小野姫より景清に送れる手紙を見て情氣に燃え、 爲に十濤を以て景清の訴人たらしむ。 景清捕縛せられて獄に投ぜらるるや、 阿古屋深く前非を悔ひ、 景清の獄舎に來つて罪を謝し、 二子を刺殺して自刃す (出世景清)。

あこやのまへ 阿古屋前。 工藤一郎祐

あさがほ 朝顔。 源氏の家人鎌田兵衛正

あさきぬ 淺衣。 布引左馬頭勝虎の妻にして笄筆の嫗なり、 夫の父布引先生勝成が春彦尊に殺された時、 尊の邸内に闖入し特統天皇を救還し、 飛鳥の里に隠し奉りて忠勳を盡す (特統天皇歌車法)。

あさひのまへ 朝日の前。 北條四郎時

あしなづち 足摩乳。 出雲國鏡の川上の長者手摩乳の妻となり、 稻田姫の母にして蘇民將來の妻賤絶の叔母なり。 素戔嗚呼が稻田姫の熱病を介抱し給ふを見、 厚く禮を述べ且つ語つて曰く、 この國に八岐の大蛇ありて毎

あたひこま 東直駒。 大連物部守屋の家

あつしげ 菅秀才敦茂。 菅丞相道眞の嫡男なり。 十二歳の時藤原時平と射藝を競ひて之に勝つ。 父が時平に讒奏せられて流罪に處せらるるや、 敦茂を連坐して還き東に追遣

らる。 後に母に従ひ父を尋ねて筑前太宰府に下る (天神記)。  
まづま 大阪新町次木屋の太夫なり。 八幡の富豪江戸屋勝二郎に落籍せられ、 井筒屋太郎左衛門に連れられて八幡に行く途中、 勝二郎の財産没収せられるに遇ふ。 太郎左衛門乃ち吾妻の身請金二百兩の不足を引調けて吾妻を勝二郎に渡す。 此れより兩人奈良に落ち行き、 吾妻は太郎左衛門二百兩を支拂はん爲再び姐家山城屋に身を沈め、 勝二郎と夫婦とならるるを悲願し、 勝二郎を刺殺して二百兩を奪ひしが、 忽ち露顯して大騒ぎとなりしを、 藤五郎の兄新七の執成によつて事なきを得たり (飛騨出世捕獲)。

あづま 吾妻。 大阪堂島新地藤屋の太夫に

あづまや 吾妻屋。 俊寛僧都の妻なり。

あつもり 無官大夫平敦盛。 一の谷の

戦敗れて逃出づる際青葉の笛を忘れて立戻り、御座船に乘らんとし海に入り、源氏の將熊谷直實に聲を掛けられて引返し、これと格闘して死す。後に冥土にて蓮生法師に遇ひて合戦の物語を聞き、生前の遺恨を酬して成佛す(大原洞啓香葉笛)

**あふみ** 近江。工藤左衛門祐經の下人なり。主命によりて白鹿を獲んとして犬坊九と共に山に入り、曾我祐成に化けたる白鹿に打獵さる。後に京小二郎の手引によりて曾我二子を大藏の遊廊に馳はんとし、鬼兄弟の爲に捕められて曾我三子に首を刎ねらる(曾我五人兄弟)

**あまつこやねのみこと** 天津兒屋根命。天津彦火瓊瓊杵尊の重臣なり。素戔嗚尊の臣鸕香背が大山祇と口論したるを叱責す。素戔嗚尊嶺山の惡鬼を平定して凱旋し給ふを遂に要して其入京を遅り、尊を諷めて出雲國殿の川上の大蛇討伐を愚立たしむ(日本振袖始)

**あまよのまへ** 雨夜前。月光の異母妹なり。母が月光を懇めるを苦にして佛道に志し、日像上人に逢うて法華經の功徳を聽聞して髪を切り、月光を尋ねて嵯峨の里に行き、兒島三郎高則の舟に乗り、高則夫妻の情にて其家に養はれ、後に高則の妻と共に高則の行方を尋ね出で、北野にて時平に捕へられ、家に連れ歸られて將に殺されんとせしを、法華經の靈驗不思議によつて免るを得たり(大皇大倫正御傳記)

**あめのわかひこ** 天稚彦。素戔嗚尊の重臣にして勇力榮に超ゆ。嶺山に惡鬼と戦つて功あり。後に鸕香背が尊に御謀反を勧むる

や、雅登大いに尊を諷め鸕香背を斬つて自刃す(日本振袖始)

**あやおりひめ** 綾織姫。美大臣種房の女なり。御藏之介齋園に連れられて丹後與謝の里に行き、世を忍びて漁夫となり給へる泊瀬皇子の御件にて歸る。皇子即位せられて雄略天皇と申す。姫は女御と申し、中若姫が天皇を慕ふせらるるや、綾織姫はこれと争うて美大臣の家臣宗宗に預けらる。諸宗綾織姫に横暴して暴行に及ばんとせしを、姫は諸門に助けられて國家の鶴岡の館に遁れ、鶴岡の忠節によりて再び宮中に戻り給ふ(浦島年代記)

**あらとろだ** 荒藤太。博多の住人白太夫の子、十六夜、小梅の兄にして性兇怒なり。父より讓受けたる田島を賣拂ひて之を浪費し、なほ父の所有地二反許を強請す。或日白太夫が小梅と遊山せらるるに、父を毆打し妹を蹴倒して藁藁竹に投げつけらる。後に父の家に亂入して藁竹等に殺さる(天神記)

**あららせんにん** 阿羅羅仙人。印度羅特山の岩窟内に隱栖す。羅摩これに仕て難行を積み、遂に廓然大悟し給ふ。仙人曰く、我は大通智勝佛劫成世界の契を違はず、阿羅羅仙人と現じ來れりとて光を放つて失す(釋迦如來誕生會)

**ありかぜ** 山上次官有風。藤原鎌足の重臣なり。入鹿の惡逆を怒り、唐装束を著し、子の在天と共に唐の使者に扮して入鹿に近づき、之を刺さんとし却つて組伏せられ、石丸に首を刎ねらる。然るに其首宙に舞ひて石丸の首を咬切り、入鹿を追拂ひて在天の縛を嚙切る(大藏冠)

**ありつね** 散位紀有常。紀名虎の子なり。惟喬親王を比叡山麓小野の閑居に訪ひ、親王が名虎の骸骨を祭らるるを見て感涙の涙に咽びしが、伴大納言宗岡が親王に謀反を勧むるを聞いて席を蹴立てて去る。かくて親王及び名虎の靈體宮中を驅ふや、有常伴り敵に一味するやう見せられて竊に天皇を落し奉り、中宮高子を大相國泊瀬寺に隠し奉らせしが、この事露顯して有常は親王に召喚せられ、中宮の首を刎ねて差出すべきを命ぜらる。是に於て有常は中宮を害すべき手紙を認め、中に杜若花の一輪を入れて暗に中宮の身代の首を出すべきを強して己が妻に送る。爲に有常の妻死して中宮の身代となる(井筒業平河内通)

**ありわうまる** 有王丸。俊寛僧都に仕へしが、俊寛鬼界島の人となり、其室吾妻屋は清盛の邸に幽せらるるや、有王丸は主の仇を報せんとし清盛の邸に亂入し、能登守教經と格闘して追拂はる。後に有王丸は俊寛を赦免せられて歸ると聞き、之を迎へんとし、備後數名浦に赴き、俊寛の歸らざるを聞いて悲歎に沈みつつ、丹左衛門尉基康より俊寛の妻女子鳥を預る。是時清盛の船もこの浦に泊り、鳥羽法皇を海に沈め奉りしを、千鳥海に躍入り俊寛を救ひ奉りて有王丸に渡す。有王丸乃ち法皇を負ひ奉り足に任せ落ち行く(平家女談島)

**あそやぎ** 青柳。融大臣の室なり。物部宿禰若主が融と青柳の妹子の日と相思の仲なりと識したるを信じ、嫉妬の間違ひより妹に刺殺され、幽霊となつて融と慶の前との難を救ふ(融大幽)

**あんかうてんわう** 安康天皇。不豫にまします上に、中若女御懷胎して更に產氣なきを歎き給ひて、位を泊瀬皇子に譲り給ふ。後に葛城山に入りて御子を尋ねられて眉輪王に弑せられ給ふ(浦島年代記)

**あんたいじいん** 安大尉。明の逆臣李隆天の侍大将なり。思宗烈皇帝の親姫華蓮夫人を弑す。後に部下の兵を連れて虎狩に出で、千里の竹林中に和藤内に殺さる(國性爺合戦)

**いへんりつし** 祐辨律師。高野山南谷吉祥院の僧にして寺小姓成田久米之介の念書なり。久米之介が雜賢屋のお梅と密通せること露顯するや、祐辨怒つて久米之介を毆打して放逐す(心中萬年草)

**いまくら** 裁松。一つ屋五兵衛の子にして嘉平次の弟なり。嘉平次放逐にして父の意に従はず、許嫁の養女おきは裁松と夫婦たらしめて、之に家督を譲らしめんとす。兄忠ひの幾松は兄の不心得を深く憂ひ、不具者となつて家督を相讓せざらんとし、山上様に祈つて眼病となり、姉に連れられて天滿の眼科醫に行く途にて嘉平次に遇ひ、幾松が兄を思へる眞情を姉に吐露す(生玉心中)

**いよく** 幾代。佐藤四郎兵衛忠信の情婦なり。忠信が源九郎義経に從ひ、平家討伐の軍に加はらんとし、幾代に懇請して忠信の軍には在藤懸信に讓され、泣いて忠信の從軍を思止まらしめんとしたり(津戶三郎)

**いけのしやうじ** 池庄司。小栗判官兼氏の家士なり。兼氏と共に相模の配所に暮らせり。行年十八(當流小栗判官)

**いこまのひめ** 生駒姫。河内國高安左

にまします上に、中若女御懷胎して更に產氣なきを歎き給ひて、位を泊瀬皇子に譲り給ふ。後に葛城山に入りて御子を尋ねられて眉輪王に弑せられ給ふ(浦島年代記)

衛門の娘なり。両親を失ひて伯父大炊之介に  
後見せらる。或日在五中將兼平・清和天皇の  
御供して来り頼る。生駒兼平と懇懇を通す。  
或夜兼平・井筒姫の所に至るを知つて生駒姫  
妬に燃え、後を追うて家を出で、大炊之介より  
兼平と見誤られて斬殺せらる。是に於て生駒  
の怨盡大炊之介を井に投じて殺す(井筒)

**いざよい** 十六夜 博多の白木夫の娘に  
して小松といひしが、京に上つて舞姫となり  
十六夜と名乗る。藁兼竹と通じて子を生み、  
之を菅公の花昌に棄て菅公の室に拾上せられ  
て深く其恩に感ず。菅公大物浦の沖にて笠見  
遊人景村の爲に害に遭はんとせざる際、十六夜  
乃ち菅公を救はんとし、我子を背負ひ七首を  
衛へて海に入り、景村に射殺せらる。時に二  
十歳許。是に於て幽霊となつて妹小梅が篋竹  
と祝言する席に現はれ、我死骸の博多の濱邊  
に打上せられたるを語つて回向を頼み、安樂  
寺に葬らる。後に荒藤木が父白木夫を害せん  
とする際にも十六夜の幽霊出でて、荒藤木の  
髻を掴んで宙に吊上げ、また法性坊僧正の門  
を破きて變成男子の祈禱を誦ふ(天神記)

**いざもん** 藤屋伊左衛門 大阪新町  
九軒町屋の名妓夕霧と馴染みて、豪遊を極  
め、七百貫の借財を負ひ家を放逐せられて落  
魄す。阿波の土平岡左近の妻雪男裝して井筒  
屋に夕霧を招き痴態をなす。是時伊左衛門隣  
室にありてこの態を見怒つて夕霧を罵罵す。  
夕霧雪に落籠せらるるや、伊左衛門は夕霧  
の昇夫となつて我子の源之介に逢ふ。夕霧隣  
屋に戻つて病革るや、伊左衛門は源之介を伴  
ひ、扇屋の門に立つて間の山の唱歌を唄うて  
夕霧と逢ふ(夕霧阿波鳴笛)

**いしゆん** 以春 京四條烏丸に住み大經  
師なり。下婢たまを戀慕して痴態をなし、妻  
のおきん之を戒めんとし不戦に陥、家騒  
動となる(大經師昔話)

**いちのしん** 浅香市之進 出雲藩士に  
して茶道指圖役を勤む。主君に従ひて江戸に  
赴きたる留守中、妻おきみ・笹野権三と姦通  
して墮落す。市之進歸國して妻の嫁・道具及  
び二人の娘を妻の遺家岩木忠太兵衛方へ送付  
け、罪を辭して忠太兵衛を訪ひ、暇乞をなし  
て女敵討に出で、山城伏見町京橋の上にて姦  
夫姦婦に出遇ひて刺殺す(鑑録三重帷子)

**いちまん** 一萬 河津祐重の子なり。幼  
時父祐重が工藤祐經の爲に殺さる。これより  
一萬は弟祐王と共に父の仇を報せんことを忘  
れず。母曾我祐信に再嫁するに及び、二子も  
其家に養はる(頼朝伊弉日記)

**いちぢろもん** 市郎右衛門 長柄の百  
姓右衛門の義子なり。大坂堂島新地天満屋  
の遊女お島と馴染む。或日お島が明石の貞と  
云ふ客に連れられ舟に乗りて浮瑠璃を語る。ま  
市郎右衛門陸よりその舟の後を追ひ行くを貞

に見始められて罵詈せらる。かくて後弟の善  
次郎の爲に親の預れる報恩講の金を盗取した  
りと誣ひられ、遂に死を決して最後の宴を近  
江屋に張り、天満屋の戸外より扇を抜きお  
島に死別を相立、長柄の川邊に迷ひ行き、お  
島の霊魂と同行交ひつて自殺す(二枚槍)

**いちる** 跡見赤穂 聖徳太子の家士な  
り。物部守屋の母の日益が佛法を罵るを聞き  
て怒る。或日赤穂が聖徳太子の妃片桐姫の  
邸を警衛せる際、守屋の部將直駒の夜襲に遭  
ひ、重創されて直駒を殺し敵を撃退す。また弓  
削勝海兵衛を直駒で殺しその死骸を収め、島主  
の二子政若・都賀若を連れ去る。後に守屋  
を河内國稻城村に攻めて之を滅す(聖徳太子)

**いつかく** 平井一角 近衛家の家人にし  
て大炊介藤原の弟なり。兄藤原が月光公を弑  
する意あるものと疑ひ、兄と格闘して祖伏せ  
しが兄の心中を知つて和睦し、日像に讒され  
て其弟子となり正覺と法名す。かくて藤谷左  
京時平が日像の寺院を襲撃したる際之と邂逅  
す(大覺大権正傳傳記)

**いつき** 「しゆいつき」を見よ。

**いなかひめ** 畠田姫 出雲國藤の川上の  
長者手摩利の息女なり。鶴鳴を追うて行き  
長葎鳴野に遇ひて相思の仲となり忽ち熱病に  
罹る。母之を介抱し左右の袖下を切裂き、風  
を入れて病を癒し、大山祇の養女として之を  
娶り給ふ。然るに稻田姫大姓の人身御供に當  
るや、母之に羽羽羽の寶剣を與へて袖に包ま  
しめて出す。かくて姫は大蛇に吞まれたる際

袖なる剣を挿つて大蛇の腹を切裂き、葎雲の  
寶剣を奪ひて出づ(日本振袖袖)

**いのは** 因幡 弘敷殿女御の腰元なり。賀  
茂河原にて安倍晴明と産屋道満と互に祈禱し  
たる事よりして、藤原女御方の女房と喧嘩  
し、藤原女御の御車を押遣る隙に倒れ、  
車轢に引裂かれて死す(弘敷殿轎子産家)

**いねばりまる** 大坊丸 工藤左衛門祐  
經の子なり。白鹿を獲んとして下人の近江、  
八幡及び藤夫桐が谷の鶯丸を従へて山に入  
り、白鹿の虎御前に化けたるに魅せられ、之  
に戀慕して遂に持来りし小鹿を奪去られ、ま  
た曾我十郎祐成に化けたる白鹿の爲に追拂は  
る(曾我五入兄弟)

**いはとのまへ** 岩戸前 中納言葛野丸  
の女にして坂上田村麿の室なり。田村麿出征  
の留守中匿名の難儀を受取り、家老廣川藏人  
秀治・荒金刑部山麿をして福引の祝を引かし  
め、自らその祝を切つて難儀を差出したる者  
を吟味し、山國の所爲たること知れ、之を斬  
らんとして却つて擲められしを秀治に助けら  
れ、秀治長良川を伴つて鈴鹿山に赴く途、  
土山にて山國等に要撃せられ、危き場を逃れ  
て田村麿と會す(田村麿初親書)

人名部

引裂き、なほ御座所近く亂入せんとせしを、兒屋根の命神鏡を捧持して追拂ふ。是に於て若根怨怒ち天稚彦に化けて素戔嗚尊の寶劍を奪うて惡鬼と變ず。尊大に怒り惡鬼と奮闘し給ひしが、惡鬼は遂に虚空に舞上りて失せたり。されど後遂に尊の爲に出雲國簸の川上鳥上の嶺に於て殺さる(日本振袖拾)

**いはふち** 岩藤。渡邊綱の妻なり。源頼朝の室伊豫内侍が小蝶の怨靈の爲に悩み給ふや、岩藤乃ち木幡を誦誦おしやなの前と相謀りて之を慰めんとし、各松明を騙し、東山大文字聖靈の送火につきて歸れやとて回向す。小蝶の怨靈蜘蛛となつて現はれしを岩藤等の四人の女長刀にて之を雜立つ(關八州驚馬)

**いへなほ** 富樫左衛門家直。加賀の地頭なり。安宅の關所を警固し、源義經等主従十二人山伏姿に扮して通過せんとするを、義經主従と推知して關の通過を拒みしが、遂に義經主従に同情して其通過を許し、なほ行先の關所通過の證書を與ふ(漆料胎内捲)

**いははる** 藤内太郎家治。菅領斯波左衛門義將の家來にして笛に妙を得たり。北山御所の門前に立てる際俄に一色大炊介久富に笛を切らる。後に義將に陪して赤沼幸滿の家に行き、計らずも妻中川の幽霊に遇ふ。赤沼父子反するや、主と共に之を吉野城に攻めて功を立つ(雪女五枚羽子板)

**いはへ** 伊兵衛。大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衛の手代なり(冥途の飛脚)

**いははた** 五百機。巨且將來の妻なり。夫の貪婪暴戾を諷めて用ゐられず、巨且遂に父を弑し、五百機を縛して蒸籠の中に押籠め

たり。後に巨且の弟蘇民將來が父の死骸を發掘したる際、巨且殺父の罪を弟に責はせんとす。是時五百機靈籠より出て實を語り、管て巨且の奪ひたる鬼の手形の守を蘇民將來に返し、夫を諷めて自刃す(日本振袖拾)

**いま** 阿今。大阪北久太郎町吉道具商笠屋長兵衛の妾なり。弟傳三郎をして長兵衛の息女お龜の御養子たらしめ、よつて以て長兵衛の家督を奪はんとして、傳三郎と共にお龜の夫與兵衛を陥れ、長兵衛をして深く與兵衛を誣まめたり(ひぢりめん卯月紅葉)

お龜の死口を寄せたることよりして阿今傳三郎の悪行暴露す。長兵衛の姉大に怒り、杖を以て阿今を毆打し、長兵衛に迫つて阿今傳三郎を放逐せしむ(卯月調色)

**いまくに** 金輪五郎今國。播磨大臣房公の執權なり。主君に陪從して白髭明神に奉詣し、繪師狩野氏久を捕ふ。逆目王子一味の惡黨が葛城大君及び花照姫を奪去らんとする輿に入替りて王子に殺せられ、粟津原に身首せらる。是に於て其亡魂氏久の婿松原の通れるを呼留め、松原の調を繕りて己が首を繋ぎ、王子に恨みを報いんことを誓ひ、首は金輪、胸は松岡なれば逆目王子の爲に還流せられ給へるを誓き添ふれば、白鷺忽ち飛び、口に咬へし笠にて船を煽ぎ戻す。金輪奮戦して惡徒を殺し帝を奪返し奉る。かくて後天目彌源次と共に逆目王子の殿内に亂入して王子の首を刎ぬ(天智天皇)

**いもこ** 小野妹子。崇峻天皇の大臣にして佛法に歸依す。天皇御不例なるに大連物部

守屋の妾内せざるを咎む。後に守屋を其城に攻めて苦戦に陥る(聖德太子)

**いよないじ** 伊豫内侍。院宣によりて源頼信と婚し、小蝶の怨靈に悩みしが、怨靈去つて病癒ゆ(關八州驚馬)

**いるか** 蘇我入鹿。性惡逆暴戾にして尊横を極む。藤原鎌足が唐太宗皇帝と婚姻を結びて、己を滅さんとするを怒つて鎌足を放逐す。後に唐使萬戶將軍の爲に殿上に取押へられ、鎌足に首を刎れんとす。是時春日社の方より佛守守護の白羽の矢飛來れるに中つて遂に滅ぶ(大雄冠)

**いろはのまへ** 以呂波前。桓武天皇の中官の上置を勤め、左中將藤原光純に懇懇す。光輝遣唐使を拜命せしかば、以呂波の前は別を惜み、之を止めんとし、光輝の兄藤原に妨げらる。光輝の渡唐中常に光輝を戀佐びしが、光輝歸朝して小川の邊にて兩人邂逅し、互に心中を語り合つて契を結べる際藤原に見付けられて罵罵せらる。以呂波の前は藤原の捨捨を氣に觸れ、水室谷に光輝の母を助へば、何者かに害せられてあるに驚き、光輝の所爲と疑ひて己其罪を負はんとし、狂人をよそはひて老母の死骸の血を塗り、家人に濡められて河村忠義の邸に幽閉せられしが、忠義夫妻の情によつて死罪を免かれ、忠義夫妻と共に逃れて奈良般若寺の傍に住み、光輝高野山にありと聞き、これを尋ねて神谷宿に至り病を得。この時光輝と遇ひし其名を語らざるを悲觀して谷に投身し、空海に救はれて蓮葉に乗じ、靈鷲を分けて都に上り、西寺の僧守敏に允認せられて地に落ちしも、空海の

行力より再び蓮葉に乗つて去る。後に守敏の講妻により畜生門の刑に處せられんとせしを、空海の方法によつて守敏滅び、以呂波の前は光輝と共に妾内することとなる(以呂波物語)

**いゑもん** 八百屋伊右衛門。大阪瀬田掛町八百屋の主人なり。淨土宗の僧者にして寺妻に餘念なき善人なれども、其妻は邪障の惡妻なりしかば、遂に養子の半兵衛・お千代の夫妻をして情死するに至らしむ(心中誓庚申)

**うけもちのをさ** 食保長。巨且將來の父にして巨且將來に殺せらる。或日田畑の見に出で巨且將來に殺せらる(日本振袖拾)

**うごん** 右近の前。中納言高房の下婢なり。高房の女三の官行方不明となりし爲右近を養女となす。平安盛・右近の前をして花山法皇の御女たらしめ、且書含めて弘徽殿女御を誘はらしむ。是に於て右近の前弘徽殿女御の繪像を見て、その執念を語つて想と怖る。是時弘徽殿の繪像動き出で、右近の前と心と人替つて法皇と争ひしが、安倍晴明の祈禱によつて弘徽殿の亡魂去り、もとの右近の前となる(傾城酒吞童子)

**うしわか** 牛若。常盤の體に抱かれて母子共に長田庄司に召捕へられ、誑金王九條九郎盛長に救はれ、母に連れられて伏見の里の雲中に寒苦を忍び、長じて十六歳の時京三條鳥九烏帽子折五郎大夫方に立寄り、左折の烏帽子折を購はんとして源氏の公達と覺られて訴人せらる。五郎大夫の娘東雲牛若に戀想し、元服祝をなして甲冑を勝れる折しも六波羅の捕手の襲撃に遭ひ、土佐坊昌俊力

行力より再び蓮葉に乗つて去る。後に守敏の講妻により畜生門の刑に處せられんとせしを、空海の方法によつて守敏滅び、以呂波の前は光輝と共に妾内することとなる(以呂波物語)

闘して敵を退く。かくて後牛若は田村社にて平家の侍監物太郎頼方の軍と戦うて之を破り官巡りをなす(源氏烏帽子折)

京五條の橋上にて千手斬をなし、辨慶と主従の約を結ぶ。母の常盤・清盛の怒に觸れ酷刑に處せられんとする時、その馬追となりて刑場へ赴き、辨慶と共に常盤を救ふ。後に三條金賀吉次僧高に従ひて奥州に下る途中三州矢矧宿に泊し、宿の長者の女淨瑠璃御前と契る(淨常盤)

母の常盤が平清盛の妾となるや、牛若は横笛と稱して其腰元となり、常盤の御髪上髷鶴と共に宿に往來の人を呼入れ、常盤色を以て其者の心を試し、源氏に従はぬ者をば牛若これを殺したり。或日彌平兵衛宗清短冠にて入り來り常盤を痛罵す。是に於て牛若、宗清に斬付く。宗清これを外し格闘に及びしが、常盤聲を掛けて牛若を制し、宗清の好意によつて常盤牛若、離鶴の三人清盛の邸を脱走す(平家女護鳥)

源義朝の第八男にして幼名を逃那王と稱し、鞍馬山東光坊に學び平家を滅さんとて多聞天を祈念す。或月夜老人に遇ふ。偶老人香を谷川に落す。牛若その香を拾上げんとする際大蛇現はれて牛若を追ふ。牛若怖れ香を拾うて老人に捧ぐ。老人香を受け忽ち大悲多聞天の姿と變じて虚空に上る。後に牛若、三條吉次僧高に遇ひ、相伴うて奥州に下るを約し、また平宗盛等が櫻符の宴席にて狼藉に及び、危かりしを世之介に助けらる。かくて僧高に連れられて奥州に下る途中、鏡川の宿にて常盤の積死體を發見し、名主の家に泊りて夜盜藤澤・村速等を斬つて母の仇を報じ、矢矧宿にて淨瑠璃姫と契り、奥州に下つて藤原

秀衡に便り、奥州勢十萬を引率して都に上る途中、矢矧宿に淨瑠璃姫を尋ねて其死を聞き、峯の藥師の笹谷なる姫の墓に詣り(十二段)

「よしつね」を見よ。

うすくも 薄雲御前。大納言民部卿藤原元方の長女なり。攝政長大にして容貌俊文の如し。勅院によりて桃園染五郎曹丹と婚す。是時妹二位の姫が曹丹に逢うて怨みを述ぶる始終を立聞き、忽ち鞍馬の相を現じて紛擾を起し、二位の姫を追うて大和路なる郡山に來り、室の遊女屋長の抱妓を殺し、二位の姫を籠殺して曹丹に斬殺せらる。後に薄雲の姿空中に現じ、我は欲子の悪鬼なりと名乗り、曹丹に飛掛らんとして二天の爲に引裂かる(日本西王母)

うだい 烏陀夷。我子堅特の墨鏡を奪ひ、之を連れて善羅天に祈願す。是時伯了頓に遇ひ、其無禮を責めて之を谷底に落し、其落せし文を拾ひて提婆達多等が摩耶夫人を健陀羅山に咒詛せざるを知る。後に釋尊降誕の際、提婆達多將軍亂入せるを追拂ひ、また耶輸多羅女が提婆達多に囚めらるる場に遭遇し、直に耶輸多羅女を連れ、敵を破つて左倍軍を斬り、耶輸多羅女を連れて檀特山に悉達太子を尋ね、太子の大悟と給へるを見て隣喜の涙に咽ぶ(釋迦如來誕生會)

うたのすけ 雅樂介。狩野四郎二郎元信の弟子なり。元信の敵雲谷と戦つて新手を負ふ(傾城反魂香)

うぢしげ 安西禪正太郎氏重。源九郎義經の家士なり。佐藤藤信・忠信の信任厚きを猜みて不和なり。繼信屋島の合戦に能登

守教經に射られて深手を負ふや、氏重は戀信の首を刎て奪價を助さんとし、戀信の郎筆鷲尾三郎を追拂ひて手負人の首をかけたば、そは戀信ならど教經の郎筆筑紫孫六安國なりしかば、其首を義經に見せて鷲尾三郎を謀せしが、事發登して辨慶に飛被さる。後に津戸三郎及び其妹早姫が戀信を尋ねて屋島に來れるを、氏重を擊つて津戸三郎に殺さる(津戸三郎)

うぢつな 加藤兵衛氏綱。もと武士なりしが浪人となる。短横笛の行方を探らねて江州越前の遊廓ひらぎ屋に登樓し、計らずも娘と遇ふ。乃ち抱主の長に願ひて之を連れ歸らんと思ひしが、長が邪智なる有様を見て斷念し、事情を源頼光に訴ふ。後に横笛がひらぎ屋長の竹實に堪へずして自刃する場に來り、横笛の手を取つて悲憤の涙に暮る(傾城酒呑童子)

うぢなが 松岡權太郎氏長。粟津が原の片はとりに住し、繪師狩野氏久の婿にして盲目なり、逆目王子の滅びんことを祈念して歸る途に今國の幽靈に呼留められ、自刎して胸を今國に與へ、以て逆目の王子を滅ましむ(天智天皇)

うぢひさ 狩野氏久。自靈明神に供へたる飯を食ひ、金輪五郎今國に捕へられて詰問せられたる答に、自分は逆目王子に強調せられて藤右大臣富房公の娘花照姫の姿を戀しぎまに描きしが、王子はそれを秘密にせん爲、我足筋を切られて此島に棄てられたる由を語る(天智天皇)

うてなのまへ 臺前。出羽國鹽田の浦藤の長者の女なり。京に滞在し、冷泉坊の法師

に誘はれて一條堂町設嚴屋吉次方に至り、融大臣と出會へる際、春主に懇撃されて堀屋に歸り、融と共に奔出して京に上り、融の室となる(融大臣)

うねめ 采女。春日の里の御酒の長の女なり。葛城大君・花照姫の放浪せらるるに遇ひ、相伴うて我家を歸る。其夜葛城大君と祝言の盃を交したる爲に花照姫被殺池に投身す。采女・姫の跡を追うて走り來り、女の道に背きしを詫言入水して果てしが、天照大神・春日住吉の大明神老翁となりて現じ給ひ、二人の女をして蘇生せしむ。是に於て葛城大君・花照姫・采女連立ちて三社禮拜に出で、まづ住吉社に詣り(天智天皇)

うのはな 卯花。播磨總郡代賀川前主典藤原教孝の重臣中務秀光の妻なり。教孝の孫光明丸を吞食ひて腫し癩癩を取れる際、光明丸の妹千壽姫に化けたる蜘蛛に啖死を囓まされて死し、後に教信上人の回向によりて成佛の姿を現す(賀古教信七墓廻)

うまこ 蘇我馬子。崇徳天皇の大臣なり。佛法に歸依し、物部守屋の軍を其城に攻めて苦戦に陥る(聖徳太子繪傳記)

うめ 阿梅。神谷宿禰質屋與次右衛門の女なり。高野山南谷吉祥院の寺小姓成田久米之介と通じ、吉祥院の法印及び久米之介に渡すべき二通の手紙を九兵衛に托せしが、其手違の破綻より久米之介・阿梅の密通露見し、爲に久米之介寺を放逐せらる。この日阿梅は親の命によつて美濃屋作右衛門と祝言することとなり、久米之介も阿梅も窮して遂に陰曆二月七日の夜高野山女人堂の傍に情死す。行年十八(心中萬年草)

人名部

うめがえ 梅枝。足利義輝の室の侍女なり。室に留從して賀茂社に詣つ。後に義輝の邪臨の刃にかかりて死し、其遺墨足利義昭の夢に現はれ、曠畫の角を振立て義輝を追ふ。(津國妻夫池)

うめがは 「むめがは」を見よ。

うめとよ 山路判官梅豊。吳服雪長の親友なり。山垣興宗が濶高姫の所持せる天鼓を奪はんと欲して、姫及び雪長を欺ける場に匪付け、松垣の奸策を觀破して之を擒め、以て姫等を救ふ。(天鼓)

うめのゐ 梅井。金剛兵衛利綱の妹なり。錦小路中納言の使者と稱して金五將軍惟茂の邸に至り、家老澤高二郎に逢ひて世繼御前及び玲輝君の處置に就き取次を請ふ。澤高その返答に窮し遁辭を設けて逃ぐ。梅井承知せずして其跡を追ひ、惟茂より二通の返書を得て歸る。(花野御本地)

うめわかまる 梅若丸。吉田少將藤原朝臣行房の子にして松若丸と双子なり。或日惡漢勘解由兵衛景逸に咳かされて深武帝の畫ける鯉に點睛せし爲、その鯉生動して庭の池に入る。梅若丸は父に叱られんことを恐れて失踪し、人商人番頼登木に捕へられて殺され、隅田川畔に埋められて墓標に柳樹を栽せらる。行年十二歳。(養生隅田川)

うりようこ 右龍虎。明の逆臣李路天一味の徒にして、南京雲門關の守將なり。國性爺の關門を起ゆるを拒み、戰敗れて死す。(國性爺合戦)

うんこく 長谷部雲谷。江州高島館の左京大夫頼賢の抱輪師なり。狩野四郎元信の

畫才あるを嫉み、家老の不破入道蓮大將と氣を結び、四郎二郎を苦しめしが遂に流罪に處せらる。(傾城反魂香)

うんそう 萬戸將軍雲宗。唐太宗皇帝の臣にして勢力あり。太宗皇帝の命を奉じ、花原等酒澤石面向不背の玉及び種種の進物を携へて瀧州志戸浦に来り、その海にて面不背の玉を龍宮に奪はれたりと披露せしが、鎌足の智略に服して都に上り、夢内して蘇我入鹿の暴逆を自撃し、これと争ひて遂に取押ふ。(大織冠)

えいなのひめ 詠歌姫。江文宰相爲成の養女なり。源頼朝の室となるべかりしを小條の蝶によりて出羽冠者頼平と婚し、頼平と共に販落する途中兎賊將軍太郎良門に脅されて遂に其一味となる。後に頼平が渡邊綱の爲に生擒せられて死罪と定まるや、詠歌姫も亦死を決す。後に頼平の罪を赦さるに及んで詠歌姫も亦その罪を赦さる。(關八州擊馬)

えいきつ 永佞。永曆皇帝の武將なり。五府將軍石門龍の謀反を甘誦に告げ、旌皇子女を連れて國性爺の行方を尋ね、勾容略にて相遇ふ。是時賊將鐵故山石運扇の追擊急なり、永佞防戦して斃る。(國性爺後日合戦)

えいりやくくわろてい 永曆皇帝。大明十七代思宗烈皇帝の皇子なり。魏祖國に攻められ、大司馬將軍吳三桂の忠節によつて難を免れ、山中に隱棲すること七年、國性爺の助勢によつて魏祖國を破り、帝位に即き永曆皇帝と稱す。(國性爺合戦)

再び魏祖國に攻められ、散輪將軍甘藷に助けられて遁れ、雲南道硯石山の麓なる陳芝豹を頼みて身を養せしが、其夜甘藷に連れられて

遁れ、廣東の津より乗船し、東寧島に航して國性爺に身を寄す。(國性爺後日合戦)

おうやうかくし 歐陽赫思。歐陽哲の父にして福建の國守六安王に仕へ、六安王の暴戻にして廢政を行ふを極諫し、怒に觸れて殺され其肉を醃にせらる。(唐船斬)蓋し歐陽凱の脚色か。凱は靈樞機兵を勤め、鳳山に朱一貴配下の將社若英と戰ひて歿す。

おうやうてつ 歐陽哲。征國將歐陽赫思の子なり。父に勸告せられて軍術者伍兼の弟子となり、夜盜を勤め朱一貴と力を格して奪け主従の約を結ぶ。是時福建の國守六安王の軍朱一貴を擯撃。哲乃ち朱一貴と伴り力戦して捕はれ六安王の前に引据えらる。哲六安王を痛罵す。王怒つて哲の父歐陽赫思の肉を食はしむ。哲悲憤の涙に暮れながら其肉を嚥下するや、忽ち大力を出して縛繩を切り、六安王の近習の臣金海道を捕ひ沸返る釜中に投じて之を殺す。是時朱一貴等來歸す。乃ち相共に六安王を攻め滅す。(唐船斬)

おしくま 外濱忍熊。景行天皇の朝東夷の首領なり。日本武尊を救ひて野原に擧ぎ、四方より軍を燒立てて辱を拭し奉らんとししが、遂に辱に殺されて滅ぶ。(日本武尊吾妻巻)

おしやなの前 坂田金時の妻なり。(關八州擊馬)「いはずち」を見よ。

おとわか 乙若。佐藤忠信の子なり。幼時母・伯母・鶴若と連立ちて三河國に行き、また義經の假駕せる奥州高麗館の城に赴く。(源義經將軍基經)

おにじ 鬼次。横山郡司信久の家士なり。主君の嬖更衣姫の入水を見るに及んで深く主

君の無情を恨み、兄鬼王と共に禿髮して藤澤上人の弟子となる。横山三郎重次が小栗判官兼氏を藤澤寺に匿ひし時鬼次之と戦ふ。(當流小栗判官)

おにとどうまる 鬼同丸。兎賊將軍太郎良門の部下なり。頼信が駿馬の歸途を市原野に要撃せんとして牛の腹中に匿れ居たりを頼信に怪まれ渡邊綱に殺さる。(關八州擊馬)(序に)。近松のこの話は、古今著聞集卷九、武勇第十二、及び前太平記卷二十一、市原野夜董源頼信の爲に生捕らるる事、頼光朝臣夜董源頼信の條に據り。

おにわう 鬼王。横山郡司信久の家士なり。信久より其相貌丑を相模津に沈むべきを命ぜらる。是に於て磯に姫を隠して逃れしむ。石を海に沈めて横山三郎重次を欺きしが、照手姫の妹更衣姫の入水するに及んで主君の無情を恨み、弟鬼次と共に禿髮して藤澤上人の弟子となる。重次・小栗判官兼氏を藤澤寺に匿ひし時鬼王之と戦ふ。(當流小栗判官)

おにわう 鬼王。曾我兄弟の下人なり。主人に従ひて三河國鳳來寺に參詣し、禪師坊が虎御前を懸懸する醜態を見て悲憤の餘り禪師坊を踏付けしが、禪師坊の深意を知つて深く其罪を謝す。また富士の對場にて京小二郎が河津三郎一代記の辻討奪するを聞き咎め、曾我兄弟と心を合せて討奪すべきを勸む。後に大藏にて工藤新經の下人近江八幡を捕へて曾我兄弟の前に引出す。(曾我五兄弟)

源氏の家人鎌田兵衛正清の郎黨加藤六有村の子にして、朝顔の弟團三郎の兄なり。姉が河津祐重に刺されたるを恨み仇討せんと思へる折から、祐重赤澤山に重傷を食ひ、祐重の二

子一萬箱王の証付けし場に來合せ、節重の代りに一萬箱王を討取らんとして戦へるを、文量上人に諭されて相和し主従の約を結ぶ。後にも名取友切丸を携へて文量の庵室を訪ふ途中、股野五郎景久に要撃せられ、奮闘して景久を殺す(本領曾我)。

曾我祐成時致兄弟の下人なり。源頼朝に遇ひて曾我兄弟が親の管工藤祐経を殺さんとすして肝膽を砕ける由を哀訴し、範頼より頼朝の前まで行き得る御符二枚を借りて之を曾我兄弟に渡す(曾我會務山)。

おほつるの條をも見よ。

「圓三郎」の條をも見よ。  
**おほつるのわらじ** 大碓王子。景行天皇第一皇子なり。王位を奪はんとすして筑紫の咒賊八十島師と通じ悪行多かりしかば、景行天皇の逆鱗に觸れて斬罪に處せられんとせられしを、吉備武彦哀訴して王子の惡心を矯正せんとし、ついでに死を以てせんとするに及んで王子深く武彦の心に感じ、非行を悔悟して兩眼を採り、これより善人となり、武彦の子の田鶴若の死骸を抱きて天皇に謁し給ふ(日本武尊吾妻鑑)。

**おほうなばらわろじ** 大海原王子。嵯峨天皇の從弟なり。生年二十三。惡右馬尉仲成と謀りて叛逆を企て空海に看破せらる。また惡僧守敏と共に北岩倉の深山に籠りて大威徳の法を修し、天下を覆さんとすして大炊介仲經に追捕はる。後遂に天皇を嵯峨の離宮に幽閉し攀らせ、自ら僧して帝と稱し淫逸驕奢に耽りしが、靈の大部を攻めて利あらず。弘法大師の覺修法の際、嵯峨天皇に飛掛らんとすして播磨藤大炊介仲經の兩人に刺殺せらる(嵯峨天皇甘露雨)。

**おほくさかのしん** 大草香臣。中帝姫に慍怒し、その戀の叶はぬを忿怒して葛城山に籠居し、名を扇庵と改めて安康天皇及び中帝姫を咒咀、以て天皇を變になし姫の機柵を封せしが、圓大臣の重臣諸宗に刺殺せらる。然るにその魂魄中帝姫の胎内に入り、袋子となつて出葛城山に棄てらる。是に於て袋子鬼子となつて眉輪王と名乗り、熊と格闘して之を斃し、直に安康天皇に飛掛つて弑し奉りしが、雄略天皇の爲に退治せらる(浦島年代記)。

**おほたかまる** 大高丸。勢州鈴鹿山の惡鬼を従へ、變身の術に長ぜしが、遂に坂上田村麿に退治せらる(田村將軍初觀音)。

**おほとらぬい** 大藤内。備前國吉備津官の稱置なり。建久四年五月二十八日の夜工藤頼經の假寐にて酒宴し寢に就きしが、其夜曾我二子に斬殺せらる(加増曾我)。

**おほひのすけ** 大炊之介。伊駒姫の伯父なり。惟喬親王の叛逆に一味し親王の命を奉じて歸せし、伊駒姫が在江中將兼平と歌の贈答せるを見て怒り、伊駒姫を虐待し兼平を欺いて清和天皇を奪ひしが、兼平の郎尊般若五郎仲則の爲に取返さる。また兼平を殺さんとすして井筒の家を襲撃し、其門前に立てる伊駒姫を兼平と見誤つて斬殺せしが、怒り伊駒姫の怨靈の爲に井戸に投込まれて死す(井筒兼平河内通)。

**おほやまつみ** 大山祇。木花開耶姫の父なり。素戔嗚尊より木花開耶姫を所奪せられたることを復讐梓尊に辱る。後に素戔嗚尊を出雲國縁の川上の長手摩乳の家に訪ひ、手摩乳の娘稻田姫を大山祇の養女として

素戔嗚尊に奉る(日本振袖始)。

**おほよど** 大淀。京都九條町の遊女なり。足利義輝に落籍せられ、三好長慶の養女として義輝の御所に入る。これより義輝益淫逸に耽り憂ふの行多し。然も大淀これを諫むこと能はず。淺川左京大夫藤孝を呼ばれ、己が心底を語らんとすして断られ、心中を打明けて斃る(津國女夫池)。

**おほろづき** 朧月。吉備武彦の妻なり。夫と共に大碓王子の惡心を矯正せんとせしが、王子更に改心し給はざるにや、夫妻死を以て謀めんとすして自殺せんとせり、時弟縁に制止せらる(日本武尊吾妻鑑)。

**おもだかひめ** 澤瀉姫。故三位伶人富士丸の娘なり。父の死後伯父太見縣主時景に養はる。時景、姫の所持せる天鼓といふ鼓を奪はんと欲し、姫を贈して巴九と共に狐釣に出でしむ。時に能勢稻荷の千年狐現はれて時景の惡心を知らず。是時景主従公卿に智略之介、天鼓を奪はんとす。澤瀉姫はこれより舟渡に下り、能勢稻荷社の官司松垣藏人興宗を便り、興宗の奸策にかかりて天鼓を奪はれんとせしが山路判官柳豐に救はれ、愛人吳服中將雪枝を奪へて陸奥局の開居を訪ひ、案内を乞うて陸奥局に陸奥局に拒絶せられ、憤怒の餘り悶絶して治太郎に害せられんとせしを雪枝の家人金目丸に救はる。後に時景も宇治太郎も滅び、姫は雪枝と共に播磨の小次郎狐に誘引せられて齋親王に謁し眞賞を賜はる(天鼓)。

(序云、澤瀉姫・陸奥局の二女が雪枝に義理を立つる核は、頼城佛の原(元祿十二年作)に奥州・今川の二傾城が榎水文麿に意氣増を磨くを海瑠璃に改作したるなり)。

**おもだかひめ** 澤瀉姫。岩倉大納言兼多卿の女にして、源頼光と婚約あり。然るに頼光は清原右大将高藤に讓せられて行方不明となるや、姫辭職して暮す。或日煙草賣の源七を呼入れ、三味線を奏かしてて武功を慰む。後に源光高懸山の鬼神を退治して武功を立てるや、澤瀉姫四位に叙せられ、勅命ありて頼光と結婚の日を定めらる(娘山姥)。

**かいそん** 常陸坊海尊。仙人となつて奥州高館に行き、武藏坊辨慶に逢うて海瑠璃姫の最期及び姫が女瑠璃に生れて天女となれることを語り、姫より託されたる桃源延命酒・銀の心葉・黄金の盃・瑠璃の盃を渡し、風に乘じて去る(源義經將軍鑑)。

**がうざゑもん** 坂部郷左衛門。澧州濱松の城主淺山氏に仕へて弓頭を勤む。或日城主鷹野の歸途を招待して齋親(吾妻甲)がうたつ剛健。陸奥王の臣なり。海道の港にて吳三桂の妻柳歌君と戦つて斃さる(國性爺合戦)。

**からまん** 赤沼前司入道幸滿。足利義教の逆臣なり。節分の夜義教を齎して其印判を奪ひ、また密偵新波義將を罪に陥れん爲に、一色大炊介に命じて義將の家來藤内太郎の携へたる笛を義教の名笛小水龍と誤信してこれを折らしめ、また藤内太郎の妻中川を欺きて義教の太刀を盗ましめ、遂に反して兵を擧げしが、新波義將等と戦ひ敗れて逃す(雲女五枚羽子板)。

**かくはん** 横川覺範。大和吉野山の僧な